

不登校、学校からの抜け出し、いじめ…。わが子はさまざま問題を抱えていた。シングルマザーの昌子さん（40代、仮名）は越前市。学校に何度も呼び出された。「先生に責められ、頭の中は真っ白。『お母さんが悪い』という言葉だけが耳に残った」

思うようにならない子ども 心身に余裕はなかった。に対し、髪を引っ張り直し、 「限界の限界」。3年前、時には階段から蹴り落とし 近くの子ども食堂のスタッフに切実な悩みを打ち明けた。夜の仕事は辞められず、

その後越前市子ども・子育て総合相談室の保健師、岩佐奈智さん（45）を紹介され、「何で私だけ？」と繰り返した。岩佐さんは当時の昌子さんの様子をこう振り返る。

「子どもが部屋から出てこない」「子どもの治療費、どうやって払おう」「自殺したい」って言ってる」。昌子さんは週に1回は岩佐さんに電話した。母から愛情を受けた記憶がなく、子どもとの接し方が分からなかった。

電話のたびに岩佐さんは自

最前線の保健師



定期的に自宅を訪ね、母親や子どもの相談に乗っている岩佐さん（左）＝2019年11月、越前市内

宅を訪ねた。日中の仕事を探すため、ハローワークに一緒に通った。今月1回は自宅を訪問している。

岩佐さんは「少子化で多くの親は学校行事などに積極的に参加するようになった。多忙で子どもと接する時間が少

ないシングルマザーは比較ざで現場に向かう。

れ、追い詰められている」。

「親から『帰れ』と拒否さ

同相談室の保健師は、若年

の妊婦や経済的な問題を抱える妊婦の支援から始まり、出産後、子育てと関わり続ける。虐待通報があれば、2人一組

置くが保育園や学校、民生委員、病院などと連携し子ども

の様子を継続的に確認する。

先生が頭をなでようとする

と、とっさに頭を抱える子どもがいる。コンビニ弁当を弁当箱に入れ替えて持つてくる子どももいる。わずかな兆候を捉え、事態が深刻なら児童相談所に通告する。

県内の児相の虐待対応件数は2011年度は166件だったが、18年度は638件と約4倍にまで増えている。

「おなか痛い」。岩佐さんに中学生の綾子さん（仮名）から電話が入った。母親と接するうちに、関わるようになった。聞くと、一日の生活がコーラ10リットルという生活が1カ月以上続いていた。

綾子さんは母親と折り合いが悪く、夜は年上の知り合いとバイクに乗ったり、ダーツ

をしたりして遊んでいた。1

カ月ほど自宅に戻らなかった時は、携帯電話に岩佐さんから50回以上の着信があった。

今は夜遊びをやめ、進学を考え始めている。綾子さんが「まだやり直せるかな？」と聞くと岩佐さんは「大丈夫」と言ってくれる。

「虐待やネグレクト（育児放棄）は時には親から子へ、世代を超えてつながっている」と岩佐さん。彼女が母になっても、寄り添い続けるつもりだ。

最近、年上の男性と付き合い始めた綾子さんにこう言っている。「絶対妊娠したらあかんよ。でも、妊娠したら言いに来るんやで」。綾子さんは「大丈夫やって」と笑う。（堀英彦）

【3面に関連記事】

児童虐待やネグレクト、いじめ、不登校など子どもを巡るニュースが後を絶たない。

当事者の子どもや親、支援する人らの経験や視点を通し、社会の問題を描く。

※次回からは県内総合面に掲載します。

世代を超え寄り添う

をいふく新
生きる

新 ふくいを 生きる

「子どもを殴ってしまう」「子どもを施設に預けた」「親が殴ってくる。家にいるのがしんどい」。県内の児童相談所(児相)には、全国共通ダイヤル「189」を通じ、さまざまなSOSや相談が入ってくる。緊急時には夜中でも職員が現場に駆け付ける。障害児や不登校児への対応など、これまでは主に養育支援を担ってきた児相の役割は時代とともに大きく変化している。県は2022年度までに児童福祉司・心理司を33人から44人に増員し、虐待対応の強化を図る。

(堀英彦) 【1面に関連記事】

■東京へ同行■

県内に2カ所ある児相の一つ、県総合福祉相談所(福井市)のある日曜。午前中、親から暴力を受けた子どもがいると県内自治体から連絡が入った。職員は2人一組で現場に直行。子どもを一時保護し、保護者に連絡してきょうだいの安否も確認した。

午後には警察から、同相談所が関わっていた子どもが県外で見つかったという一報。現地の児相に一時預かってもらうよう調整した。

翌日の午前2時半には、JR福井駅近くで富山県出身の

変化した児相の役割

子どもを保護したという連絡が、再び警察から入る。子どもを預かり、職員が車で富山まで送った。

「東京まで車で移送したこともある」と話すのは、同相談所の加賀ゆかり課長。自殺目的で福井に来た女子高生だった。後部座席に座らせた女子高生の両側を女性職員が挟み、運転席と助手席には男性職員の計4人が同行した。電車だと安全が確保できず、逃走の恐れもあるからだ。

■条約採択■

児相は戦後、戦災孤児らの保護を目的に全国に設置され、時代とともに役割は変化していった。

同相談所の岸野徹所長は「1970年代は自閉症の子どもたちをグループセラピー



虐待通報などに対応している相談員。夜中に待機職員が現場に向かうこともある＝2019年12月、福井市の県総合福祉相談所

するといった、クリニック的な役割を担っていた」。70年代前半には乳児の遺体をコインロッカーに遺棄する事件が頻発したが、児相が積極的に関与することはなかった。ある福祉関係者は「親による子どもへの体罰や暴力を『犯罪』とみることには、消極的な時代だった」と振り返る。

89年、国連で「子どもの権利条約」が採択された。子どもへの差別、虐待禁止などが定められ、日本は94年に批准した。翌年にはオウム真理教の施設で発見された子どもたちが、福井をはじめ全国の児相に一時保護された。厚生労働省は97年に全国の児相に虐待に対する積極介入を促す通称「434通知」を伝達。00年、虐待防止法が成立した。

■パンドラの箱■

法律ができたことで減ると予想された虐待対応件数は、増加の一途をたどる。18年度は全国で15万9850件、福井県内は638件とこちらも過去最多。福祉関係者は「あの法律は、パンドラの箱を開けてしまった」と指摘する。

県は今後、児童福祉司・心理司を大幅に増員する方針だが、「増員だけでは体制強化にならない」という声も根強い。千葉県野田市の虐待事件の検証委員長だった川崎三彦さんは、「促成栽培で人は育たない」と研修部署の新設を提言した。

児相が子どもを一時保護するときには、家族と対立するケースも多い。ある福祉関係者は「その児相が、親子関係を再構築することができたらどうか」と疑問を呈する。別の関係者は「そもそも児相に、一刻を争う虐待対応は難しい。児相は養育支援、別組織が虐待対応と役割を分けるべきだ」と指摘する。

虐待対応増加の一途

子どもたちが学校に行っている平日午後。越前市の児童養護施設「一陽」では、職員8人が子役と先生役の2人1組になって、問答を始めた。テーマは「学校に行きたくない」という子どもへの対応」。

子役「学校に行っても意味がない。のけ者にされるし」
先生役「言ってくれてありがとう。でも今まで学校行っ

てたのはすげえよ」
子役「大人になっても、ここにいられるんか？」
先生役「期限は決まってる。学校も嫌、仕事もしたくない、では難しいぞ」
問答は平日は毎日行われる。「朝ご飯を食べない」「原付きバイクに乗りたがっている」「教科書を投げ付けてくる」などテーマは子どもたちの日常に起こり得るものばかり。職員の藤下樹さん(31)は「現場での対応力をつけるのが狙い」と話す。

■ ■ ■
身体、性的、心理的虐待や
ネグレクト(育児放棄)、貧

児童養護施設

困などで家族と暮らせない小学生から高校生まで40人が入所する。中には、親子が10年以上顔を合わせていないケースもある。子どもと会おうとしない親がいる一方、SNSで親の名前を検索し近況を知ろうとする子どもがいる。

施設では男女別に6〜7人の縦割りグループをつくり、住まいを分けている。玄関、台所、風呂も別々で、食事もグループごとだ。リビングダイニングの共有スペースや、机、ベッドが置かれた四畳半ほどの個室などがあり、生活環境は家庭に近い。

夕方4時すぎ。子どもたちが帰ってきた。ある女子児童は「〇〇家のルール」という宿題を職員に見せ「〇〇家



学校から帰り、職員と一緒に夕食を取る子どもたち。それぞれ個室が与えられている＝2019年12月、越前市の「一陽」

て何て書けばいいんや？ 一陽か？」。学校の保護者会や授業参観は職員が出席しているが、クラスメートから「一陽って本当の親じゃないんや」と言われることもある。

別のグループでは、児童がお小遣いで買ったばかりのイヤホンが、個室からなくなつた。午後6時の夕食を終え、職員が一人一人にさりげなく聞いて回ったが、真相は分からずじまいだった。

「相手の気持ちを理解できない子どもがいる」と、ある職員。「いじめた子に『相手はどう思ったと思う？』と何度尋ねても『(私が)たいた』『ばかって言われた』など、事実だけを答える」

県内の臨床心理士は「他人への共感の大前提は、自分への共感、自己肯定。親に大切にされた経験が少ない子どもは他人を思いやれないことがある」。ただ、発達障害や知的障害の子どももおり、職員の言葉をどこまで理解できているのかの見極めは難しい。

学校内での偏見、親に会えない寂しさ、将来への不安など多くのストレスを抱えた子どもたち。そのストレスが職員への暴言や、時には暴力につながる。以前入所していた20代の女性は「自分のことはいっぱいいっぱいだった。化粧をして、職員から『どうした？』と言われただけで、いら立った」と振り返る。

イヤホンは翌朝、ごみ箱の中から見つかった。社会に出れば「施設出身者」として配慮されることはない。退所後に子どもたちを待ち受ける厳しい現実を踏まえ、職員たちは自立支援のあり方を日々模索している。

(堀英彦)

不安に向き合う日々

新 ふくいを 生きる



幼い頃から高校を卒業するまで、越前市の児童養護施設「一陽」で暮らした。病弱だった母は4歳の時に亡くなった。父は全国を転々とする仕事だった。ゆりさん(21)は「母親も家族だんらんの記憶もない」。鉛筆やマシックで絵を描いている時だけ、心が落ち着いた。

高卒後は美術の学校に進みたいと思っていた。「高校生活では、とにかくバイトでお金をためた。ためた分だけ、行ける可能性が高くなると思った」。土日を中心にコンビニで働き、卒業までに90万円ほど貯金ができた。

進路を決める時期に父の体調が悪くなり、進学か就職かで悩んだ。担任の先生は「悩むんだったら行け(進学しなさい)。後悔するぞ」と背中を押してくれた。一陽の職員は奨学金制度のパンフレット

を取り寄せ、自治体の補助金のほか、個人・団体による数万円の支援でも申請してくれた。

「大人は私の将来を閉ざさず、広げてくれた。進学できるんじゃないかと、その時に本気で思えた」。願いはかない、2017年、県外の芸術短大に入学。一陽から短大に進んだのは初めてだった。

■ ■ ■
全国の高卒者の大学や短大への進学率は52・2%(15年度)なのに対し、施設児は12・4%。施設には措置延長や自立支援事業で22歳までいることが可能だが、高卒で就職し退所するのが一般的だ。高校中退の場合も、退所するケ

18歳で児童養護施設退所

自立に支援欠かせぬ



短大を卒業後、出身の施設で働いているゆりさん。退所後の子どもたちの人生はさまざまだ＝2019年12月、越前市の「一陽」

■ ■ ■
一陽の橋本達昌所長(53)は「『中退や就職をしたのに施設にいるのは甘やかし』という批判はある。だけど自分に置き換えてほしい。18歳の時に家族の支援がない状態で自立できただろうか。私なら無理」。逆に、就職した子どもは「退所後5年のスパンで居を始める親もいる」。

■ ■ ■
短大を卒業したゆりさんは、19年9月から一陽の職員として働いている。子どもたちと自分が重なり、会話の時は「これ言つと、傷ついちゃうかなって考える。だから『私もあったよ』と自分の経験を伝えている」と話す。

10年以上過ごした施設は、ゆりさんにとって「一番話を聞いてくれるところ。家に近い学校」。学生時代、帰省した時には必ず立ち寄る場所でもあった。

ただ、OB会を開いても顔を出さず、所在不明の退所者も少なくない。ある施設関係者は「退所後5年のスパンで見れば、所在不明者は5割くらい」。近年は礼金敷金がなくとも入居できるアパートがあり、派遣など期間限定の仕事もある。住まいの移動が簡単になったことも一因だ。

家族との関係を構築できないまま、「児童福祉法」の児童に定義されている18歳で、社会に投げ出される子どもたち。その後職を転々とし、生活保護の道をたどる人もいる。橋本所長は「退所後の子どもたちの人生を、自己責任論だけで片付けてよいのだから」と疑問を投げ掛ける。

親になりたかった鯖江市の吉村幸治さん(47)、理恵さん夫妻は2015年3月、里親登録をした。児童相談所から2歳の女の子を紹介された。母親になるために、理恵さんは毎日、その子のいる県内の乳児院に通った。法的に親子になる特別養子縁組を希望した。

会ったたび、女の子は泣きじやくった。困らせる態度を取って、愛情や信頼を確認する「試し行動」とは分かっていたが、初面会から1カ月後、理恵さんは疲れとストレスで倒れ、救急車で運ばれた。それでも「母になりたい」という思いは強く、面会を再開。散歩やドライブをしたり、自宅で同じ布団で寝たりして、16年6月から一緒に暮らすようになった。翌年、特別養子縁組が成立した。縁組とは別に、里親には期間を定めて子どもを預かる「養育里親」もある。里親手

特別養子縁組



特別養子縁組を結び親子になった吉村夫妻と結月ちゃん。「お父さんに似てるね」と言われることもある＝2019年11月、鯖江市内

当として、月額8万6千円(2人目以降は同4万3千円)のほか、医療費や教育費なども支給される。

■ ■ ■
県内では近年、関西の乳児

院から子どもを受け入れ里親となるケースが増えている。出身の4人の子どもが県内で特別養子縁組を結んでいる四恩学園乳児院(大阪市)の大江上乳児は家庭復帰は困難と指摘する。

入所理由として「4割が母の精神疾患・知的障害、3割が虐待。未受診で飛び込み出産」というケースもある。7割以上は現在、保育園に通って

入所している約70人の乳児のうち、常に10人ほどは親が里子に出すことに同意しているという。こうした子どもたちには、里親募集の新聞記事に写真付きで掲載される。

「むっちゃんって、お父さん似だね」。19年9月の運動会で理恵さんはある母親から声を掛けられた。「実は特別養子縁組なんや」。ママ友に初めて打ち明けた。

ただ、里親と里子のマッチングについては慎重な調査が半年ほどかけて行われる。里子を迎え入れた県内の女性は「仮に障害が判明しても養育できるかなど、何度も面接を受けた。自分の生い立ち、夫婦のなれそめ、身内が亡くなった時の状況など、親や周囲の人と自分がどう関わってきたのかを細かく質問された」と振り返る。

今回の取材では、夫婦で話し合い、実名で出ることを選んだ。理恵さんは「いずれ生きていける芯の強い人間に育てたいから」と話す。結月ちゃんの誕生日には、乳児院からもらったアルバムを、毎年一緒に見る。そこには結月ちゃんを抱く生母の写真もある。理恵さんは「むっちゃんを産んでくれた人だよ。むっちゃんにはお母さんが2人いるんだよ。すごいんだよ」と語り掛ける。

吉村夫妻の娘、結月ちゃんが2人いるんだよ。すごいんだよ」と語り掛ける。

テレビ局が企画した「10年後に届くママからの手紙」。理恵さんは手紙に思いをしたため「あなたを産んでくれた母に会いたくなったら、協力するから言ってくれ」と結んだ。

お母さんが2人だよ

女性は身ごもってから30週を超えていた。母子手帳はなく、いわゆる未受診妊婦だった。予期せぬ妊娠に、病室では「産みたくない。この子さえいなければ」と嘆いた。

児童虐待や、支援が必要な市出身は、女性からの希望を聞く形で児童相談所の職員と里親制度を紹介した。

赤ちゃんが生まれると女性の態度は一変した。写真を撮ったり抱っこしたり、まさに母の姿だった。現在は里親に育てられている。

女性が付けた子どもの名前には「愛」の文字があった。「赤ちゃんを憎んでいるように見えたのに、愛の文字を入れるんだな」。自分の生い立ちと重なった。

「ほんの少し歯車が狂えば、私の人生はきつと違ったものになっていた」。近藤さん

里親制度



里親に育てられ、児童福祉の道に進んだ近藤さん。「実親を批判しても問題は解決しない」と話す＝2019年11月、大阪市内

は生後6カ月から里親に育てられた。その家庭には当時、成人から高校生まで4人の実子がおり、特別養子縁組を結んで末っ子になった。

2年時には生母は生きていると打ち明けられた。「真実の告知により、パズルが1回崩された。そこから自分は何者かという探求が始まった。」

幼稚園に入った4歳の時、母から血のつながった親子でないことを告げられ、中学

児童福祉の道に進みたいと、母に打ち明けたのは高校2年の時。「生い立ちと重ね、正しい判断ができなくなる」と反対されたが「私だから」と譲らなかつた。

社会福祉士となり、さまざま

まなケースに対応してきた。代男性は高校生の女の子を虐待する母親の生い立ちを調べると、自身も親から虐待を受けていた。子どもを手放さざるを得ない事情も理解できた。「親を批判しても、問題は解決しない。地域としてどう支援できるかを考えるべき」と強調する。

里親制度は少し前まで「児童福祉の隅に追いやられていた」（福祉関係者）存在だったが、家庭的養護の重要性とともに見直されている。委託率は年々上昇し、17年度末時点で19・7%。厚生労働省は50〜75%の目標を掲げる。

ただ「数合わせになると行政はおかしくなる」という指摘はよく聞かれる。県内の50

県里親会の福谷光則会長（54）は「里親と里子が関係を築くのは簡単ではなく覚悟がいる。悩む里親の支援システムが必要。子どもが里親と合わす、たらい回しにされれば心の傷は深まる」と懸念する。

近藤さんは「里親に適応しようとしている子どもも苦労している。愛情の上書きは難しい」と里子の思いを代弁する。「だから0、1歳から里親が育てた方がいい。私も3、4歳で里子に出されていたら、今のようない関係構築していたかどうか分からない」と話す。

愛情の上書き難しく



シングルマザーの母は仕事で疲れてしまつたのか、帰ってきててもご飯を作らなかつた。敦賀市に住んでいたゆうきさん(19)は中学時代、部活でテニスをしてた。空腹を紛らすため、家に帰った後は近くの公園で壁打ちをして、午後9時ごろまで時間をつぶした。

給食だけの1日1食の日も珍しくなかつた。慣れれば空腹の感覚もなくなつていった。感情的になつて母に怒りをぶつければ涙が出るのは分かつていたから、キレたことはない。

学校の先生に紹介され、中学3年の1月から、同市の子ども食堂「青空」に通い始めた。「みそ汁を飲んで、ああ、自分はおなかですいているんだなって」。月に2回だが、確実にご飯が食べられる日が増えてきた。帰る時には残り物を

心安まる「食堂」

持たせてくれた。

食堂は心安まる場所だった。「学校であったことを話したり、年下の子どもたちに遊びを教えたり、人と接することが楽しかった」。中学の卒業証書は食堂へ持って行き、スタッフに見せた。

食堂には高校を卒業するまで通い、2019年4月、京都市のホテル・旅行専門学校に入学した。

■ ■ ■
NPO法人「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」(東京都)によると、全国の子ども食堂は18年比1.6倍の約3700カ所。貧困対策という側面が強調されがちだが、むすびえ理事長の湯浅誠さんは「縦(年齢)にも横(収入)にも割らない場所」と指



子ども食堂でボランティアをしているゆうきさん(中央)。「自分にとって心安らぐ場所だった」と話す＝2019年11月、京都市内

摘。実際は多世代交流の場になっていく。

寺や自治会、企業も運営に加わり始めている。コンビニ大手のファミリーマートは19年4月、店舗スペースを利用した「ファミマ子ども食堂」を始め、同年10月末現在で225店舗が実践した。

活動支援に乗り出した自治体もある。全28小学校区、43カ所に子ども食堂がある兵庫県明石市は、一般財団法人を立ち上げ、食堂を運営するグループに開催1回ごとに2万円を助成している。18年度は延べ約8千人の子どもが利用した。

■ ■ ■
「宿題の作文に、食堂のことを書いていました。大切な場所になっているようです」子ども食堂がある日は、とても

張り切つて学校に行きます」。開所から5年を迎えた「青空」の中村幸恵代表(53)には、保護者からこんなメールが入ってくるようになった。「オー

ブン当初は批判されたこともあったが、続けてきてよかった。(通ってくる子どもたちには)子どもを大切にする大人になつてほしい」と願う。

ゆうきさんは授業やホテルマンのアルバイトで忙しい中、京都市内の子ども食堂でボランティアを始めた。19年11月のある日のメニューはご飯、唐揚げ、カボチャ入りのみそ汁など。ゆうきさんは「これおいしいよ」と小学生に話し掛けた。質問されれば目線を同じ高さに合わせて、笑顔で答える。

「ホテルマンは人に喜んでもらえると思った。優しい人間になりたい」。食堂に通い、自分の存在を認めてくれる大人たちに出会った。食堂があったからこそ、接客業に進みたいという気持ち芽生えた。

(堀英彦)

新しい生活を

自分の存在確かめる

「当然、学校からも出るんやろうな」。県内のある小学校。学校側が下校の見守りの協力を求めると、地域住民から声が上がった。時間帯は学年ごとに違い、多い日は3回に分けて道に立つ。校長は教員の働き方改革への理解は進んでいるとしながらも「『忙しくて出られません』とはとても言えない」とこぼす。

放課後児童クラブと高齢者 童合宿では、合宿所から銭湯による餅つき大会には若手教員が担当した。地域主催の児童が参加した。学校、地域、保護者がどこまで子どもたちに関わるべきかという境界線はあいまいだ。ただ、学校が地域に助けをもらう場面は多い。児童が総合学習で地元の自然環境を学んだ時は、講師を手配してくれた。それができるのは「日頃から行事に参加し、地域とコミュニケーションを取っているから」と校長。多忙化の解消と、地域との関わりをバランスに頭を悩ませる。

ふくいを 生きる

新

ある児童が登校しなかった。担任の教員は保護者の携

学校、地域、家庭

帯電話に連絡したが、つながらなかった。教頭が家まで行くこと、児童がいた。集団登校に遅れたからだという。親は仕事で不在だった。

箸の持ち方や掃除の仕方、靴のそろえ方などの指導を学校に求める保護者もいる。ある市教委の幹部は「親は子どもものしつけを外注してはいないか」と指摘する。

子どもを巡る学校と家庭との関係においても、学校がカバーする範囲が広がっている。先の市教委幹部は「木に例えるなら、中心を支える幹（家庭）がどんどん細くなり、枝（学校）が太くなっているアンバランスな状況」と話す。

保護者や児童との関わり方に悩み、1年以上仕事を休んだ経験を持つ県内の小学校教



マルシェや次の行事について吉垣主事(右)らと打ち合わせする「至民まちづくり委員会」メンバーの生徒たち＝2019年12月23日、福井市至民中

諭は「教員の負担は大きすぎる」と声を上げる。

「試食を用意すれば、もっと売れたかも」「どうしたら地域が楽しくなるかな」。2019年12月中旬、福井市至民中の「至民まちづくり委員会」の生徒が、運営側で参加したマルシェや次の行事について、社南公民館の吉垣優美主事と話し合った。

委員会は18年春、生徒有志が結成。地区の団体が同校生徒にイベントや行事の参加を依頼する際、公民館とともに橋渡し役となっている。マルシェのように委員会の生徒が企画段階から参画するケースもある。高齢化が進む地域にとって「柔軟なアイデアを出してくれる子どもたちは、活力を与えてくれる存在」（吉

垣主事）だ。

以前は、団体からの依頼は学校が窓口となっていた。教員はその都度、生徒を募り、生徒の司会練習や行事当日も付き添っていた。今では荒天時の中止連絡なども学校を介しておらず、生徒と吉垣主事が直接やりとりしている。

委員会の生徒は自分たちで人集めを行うほか、催しの準備などで地域の人と接する場面も多い。小武真侑（3年）は「お手伝いより達成感がある。地元のため何ができるか考えるようになった」。山崎悠未さん（同）も「地域の人と直接触れ合って、地域の良さが分かってきた」とそれぞれ手応えを感じている。

小林真由美校長は教員の気持ちにゆとりができていると感謝を表し「学校、保護者、地域が協力し、社会全体で子育てをするという意識を持てれば良いのではないでしょうか」と話す。

（栗原愛）

全体で育てる意識を

仲が良かったクラスメートの日系外国人は、いじめられていた。やがて、矛先は自分に向いた。小学4年生の時だ。無視から始まり、靴を隠され、洋式トイレに教科書をつっ込まれた。いじめっ子はクラスの一部だったが、誰も助けてくれなかった。担任はいたずらと勘違いしているようだった。

県内の康彦さん(16)は、仮名は、学校に行かなくなった。6年生になり、学校に戻ったがいじめは続いた。中学1年で再び不登校になった。「僕は精神的に死んだ」と当時を振り返る。

親は学校に行かせようと、車の助手席に乗せた。校門の前で降りた康彦さんは、門をくぐるふりをして近くの公園で時間をつぶした。家では寝るか、読書の日々。ネットのウェブ小説も読みふけた。親に迷惑を掛けずに死ねる方

フリースクール

法を考えた。

文部科学省によると、2018年度の県内の小、中、高校の不登校者は1054人。不登校者のうち年間90日以上欠席した小学生の割合は50.3%、中学生は64.4%で、長期化が課題となっている。

「不登校の児童生徒の多くは、罪悪感を口にする。ここ(社会)にいていいのかという不安を持っている」と話すのは、18年6月から福井市内でフリースクール「福井スコール」を運営している小野寺玲さん(30)。「子どもは必死に居場所を探している。生きていていいんだという場所でありたい」。自身も不登校経験者だ。

康彦さんは高校には進学せ



不登校の児童生徒を受け入れている「福井スコール」。子どもたちは必死に居場所を探しているという＝2019年10月、福井市グリーンハイツ8丁目

ず、アルバイトをしながら福井スコールに通っている。ここで自分のペースで勉強しながら高卒認定試験を受け、大学で学びたいと考えている。

不登校経験者で、福井スコールにボランティアとして関わっている心理師の新野青那さん(27)は「大人が多様な生き方をしていないから、既存の学校システムでは学力という尺度でしか子どもを測ることができない」。小野寺さんは「学校では、安心して通えるという福祉的な部分が軽視されてはいないだろうか」。

不登校問題の解決には公教育のあり方についての議論が必要だと指摘する。

フリースクールは学校教育法が定める「学校」ではなく、

通っても義務教育修了と認められない。過去には義務教育制度に位置付ける法律の制定に向けた動きもあった。

ただ公教育として組み込まれれば、教育内容が重視されることになる。福井市で子ども食堂などに関わる50代男性は「フリースクールでゲームをやめることで落ち着き、何かを始めようという気力が湧く子どももいる。公教育でゲームは認められないだろう」。

一方、フリースクールへの公的な財政支援は基本的になく、運営は厳しいのが現状だ。先の男性は「教育ではなく、居場所づくりとしての予算を付けるべき」と提案する。

県内には、交通手段がないため、フリースクールに通いたくても通えない子どもも多

いとみられる。康彦さんは「18歳になったら車の免許を取って、福井スコールまでの送迎バスを走らせた」。生きる希望が見つかったこの場所と、子どもたちをつなげたいと思っている。(堀英彦)

安心して通える居場所

新 ふくいを 生きる

「あなたは外国人だから仕方ないのかもしれないけど」。
 ブラジル国籍のリカ(仮名)は中学2年の春、友達とのけんかを巡って担任教諭から投げ掛けられた一言に「差別」を感じた。外国人だから友達をたたいたのではないか。そう聞こえた。本当は手なんか出していないのに。周囲からの無視が始まり、学校に行かなくなった。

ブラジル生まれ。2歳から日本語ができないブラジル人。福井県内で暮らし、言葉に不自由は感じない。不登校の間、役所で何度もポルトガル語を

通訳した。数千円の謝礼は、自分と幼いきょうだいを1人で育てる母親に渡した。人の役に立つのは楽しく、英語を勉強し3カ国語を扱う通訳になる夢が芽生えた。

ただ、進学した定時制高校でモチベーションは続かなかった。「授業中に周りはみんなスマホいじってるし、全然集中できない。ここにいても時間のむだじゃない?」って。バイトして自立を急ぐ方が意味があるように思えた。中退

外国籍



定時制の外国籍生徒の質問に熱心に答えるカラースの大学生(中央)＝2019年12月、浜松市の浜松大平台高

したいと母親に告げると、反対されなかった。

「新しい知識を学ぶのは大好き」と語る一方で「特に今は目標とかはないかなあ」。屈託なく見える笑顔の奥には、夢に対する「未練」が見え隠れする。

約2万5千人の外国人が暮らす工業都市の浜松市。浜松大平台高の定時制には約120人の外国籍生徒が在籍し、約60人が通う三部(夜間)の外国籍率は4割を超える。

昨年12月中旬、夜間クラス

で5年後の理想の自分を思い描くワークショップ(WS)が開かれた。講師は同市の静岡文化芸術大の学生とOBら約10人でつくるグループ「COLORS(カラース)」のメンバーで、全員が外国籍。移住者の親を持ち、浜松で生

ある県立高の50代教諭は「生徒の才能を伸ばすことが学校の役割だが、現状では残念ながら外国籍の子どもたちの才能に十分に光を当てられていない」と明かした。(高島健)

まれたり育ったりした、いわゆる「第二世代」だ。

WS中、南米出身の女子生徒の質問にカラースのコロンビア人、ロハス・アンヘラさん(同大1年)が熱心に答えていた。大学のカリキュラムや入試制度について聞いた女子生徒は「卒業後は専門学校を考えてたけど、大学っていいね。将来のチョイスの幅が広がるって教わった」と目を輝かせた。

設立メンバーの宮城ユキミさん(25)は10歳でブラジルから来日。全く日本語が話せないところから努力を重ねて全日制高校、同大へと進み、現在は静岡県内の物流企業の総合職として働く。「ゼロからでもここまでできるといいうルールモデルでありたい」

教室には日本人もいて、不登校を経験した生徒もいた。カラースを支援する浜松国際交流協会の職員、鈴木恵梨香さんは「第二世代の若者たちはもはや国籍に関係なく、いろいろな生き方を受け入れる社会の道しるべになり得る存在」と強調する。

福井県教委は今春の県立高入試から、日本語指導が必要な外国籍生徒のための特別選抜を全日制2校で実施した。足羽高に3人が合格したが、外国籍の児童生徒が多い越前市の武生商工高への出願はなかった。特別選抜実施校でのサポート体制はまだ決まっておらず、現状では外国籍の生徒が比較的多い定時制を含め、通訳や外国語が話せる支援員を置く県立高はない。

ある県立高の50代教諭は「生徒の才能を伸ばすことが学校の役割だが、現状では残念ながら外国籍の子どもたちの才能に十分に光を当てられていない」と明かした。(高島健)

足りぬ支援 眠る才能

新しい心を生かす

小学5年生の時、西野杏奈さん(19)＝仮名＝の両親は離婚した。母子家庭になり、西野さんらは築50年の古い借家に転居。生活保護を頼りに暮らし始めた。天井裏からは獣の足音が聞こえ、すきま風が絶えなかった。

母の裕子さん(50代)＝仮名＝は落ちていたが、就労継続支援名＝はステージ4の乳がんをのA型事業所で働いた。生活経験し、パニック障害を抱えていた。病気の影響で体力は

をふくいを 生きる

新

円。1日の2人の食費は800円だった。杏奈さんは「5千円のコートが欲しいときは母と相談し、2カ月間食費を切り詰めた」と振り返る。高校では予習復習を欠かさなかった。2年生の春、中間テストで70人中30位に入ると担任教師に大学進学を勧められた。「就職先の幅は広がると思ったけど、うちにそんなお金はない。申し訳なくて母には言い出せなかった」

裕子さんは、保護者面談で担任から杏奈さんの大学進学

貧困家庭から大学進学

の話聞いた。一度は断ったが「私の夢は娘に普通の家庭を持ってもらうこと。お金がないからとあきらめるのはだめだ」と思うようになった。

杏奈さんは勉強を続け、2019年4月に県内の私大に入学。進学を機に、裕子さんとともにアパートへ引っ越した。国の進学準備給付金で洋服やかばん、教科書をそろえた。入学金の一時金25万円は父に出してもらった。

杏奈さんの口座には毎月、2種類の奨学金から計8万3千円が入金される。だが、授業料を差し引くとほとんど残らず、家計は裕子さんの生活保護費に頼っている。少しでも足しになるよう土日はアルバイトし、毎月5千円ずつ貯金している。卒業後には奨学



資格取得を目指し勉強する杏奈さん＝1月、県内

を抑える。通学は自転車と電車を乗り継ぐ。雨の日は友達が車に乗せてくれる。安定した生活を送りたいという思いが強く、杏奈さんの卒業後の目標は公務員。「結婚して、平凡だけど幸せな暮らしがしたい」と願う。

貧困家庭の子どもは、大学進学をあきらめるケースが多い。18年度の内閣府の調査によると、生活保護世帯の子どもの大学や短大などへの進学率は36・0%で全体平均72・9%の半分以下だ。進学すれば同居でも生計が切り離され給付額が減る「世帯分離」制

度が原因の一つとされる。裕子さんの生活保護費は2万円近く減り約12万円になった。低所得世帯は、20年度から

導入される大学など高等教育の無償化制度により、授業料などの減免や給付型奨学金が受けられることになった。杏奈さんも4月以降、授業料が大幅に減免される。福井弁護士会人権擁護委員会貧困対策部会長の堺啓輔さんは一定の評価をしつつも「問題の根本的な解決にはまだ遠い」と受け止める。

文部科学省の調査では、公立小中の9年間でも給食費や学外活動費などで約340万円が必要となる。堺さんは、部活動の道具が買えず入部をあきらめるようなケースがあり「コミュニティに入れない」「クラスで孤立し、学校が楽しくなくなると勉強もできなくなる」と「負の連鎖」が起りうる現状を指摘。杏奈さんのように貧困家庭の子どもが勉強を頑張るケースは珍しいとし「授業料以外も無償化し、平等に教育を受ける機会を与えないと貧富の格差はは

普通の幸せ諦めない

くならない」と訴える。

(北川龍次)

所得制限を設けずに中学生までの医療費、保育料を無料にしたり、児童相談所（児相）を開設したりするなど、子どもを核にしたまちづくりを進める兵庫県明石市。7年連続で人口が増加し、税収増にもつながっている。2011年から市長を務める泉房穂氏（56）に、政策に対する考え方や社会への影響などを聞いた。

（聞き手・堀英彦）

医療費、第2子以降の保育料、市営施設の子どもの利用料などを所得制限なしで無料化した。救貧ではなく、未来をつくる政策だからだ。親の所得で二分せず、預かった税金はすべての子どもに返していく。

農耕民族の日本人はもともと、大家族や村社会によって子どもたちを守ってきた。近年は「子どもは親の持ち物」というような感覚の人も増えてきたが、核家族化が進み、地域コミュニティが崩れて

明石市（兵庫）市長に聞く



子どもを核にしたまちづくりを進めている兵庫県明石市の泉市長。「定住人口が増え、経済が回り出した」と話す＝2019年12月、同市役所

いる今、行政と民が連携し社会全体でセーフティネットを張らなければならない。市長になり、子どもに関しての予算を2倍、職員数は3倍にした。予算編成権と人事権がある市長だからできる。18年4月に中核市になり、駅前

前に児相を置いた。決意だけではなく、金と人をかけ、腹をくくってやっているからか、児相については周辺住民の反対に任せ「暮らす」「育てる」に重点を置いている。まさに変化が出てきた。人口は7年連続増。13年の29万人から29万9千人になった。

転入、転出者の数を年代別にみると、市全体の転入超過分の9割以上を20～30代と0～4歳で占め、子育て層が引越してきていることが分かる。出生数も4年連続増。新築戸数や新規出店も増え、経済が回り始めている。

若い層の転入により納税者が増え、税収もアップした。つまり子ども政策は、お金の面から高齢者を支えている。2人で1人の高齢者を支える

肩車社会が迫る中、支える側と支えられる側のバランスが重要。子ども政策はみんなのためのものであることを、リアリティーをもって説明できていると思う。昨年の市民意識調査では「住みやすい」と答えた人が91・2%に上った。

子ども食堂は全28小学校区にあり、現在43カ所。1回につき2万円を助成している。使い方は自由。食材に使ってもいいし、学習支援の学生のバイト代に使ってもいい。領収書はいらない。領収書を張り付ける手間、それをチェックする人件費、どれも無駄。市職員はチェックするより食堂に行つて大根を切ればいい。市民を信用し一緒にまちをつくる。

手話言語・障害者コミュニケーション条例や障害者配慮条例もつくった。犯罪被害者支援、更生支援にも取り組んでいる。目指すのは子どもを含め誰も排除せず、官民含めた「困ったときはお互いさま」のまちだ。

これからは、市民のニーズをいち早く捉えられる自治体が成功事例をつくり上げ、横に広げていく時代。明石の取り組みを、多くの自治体が参考にしてほしい。

＝「新・ふくいを生きる」子ども」おわり＝

子育ては未来の政策

新・ふくいを生きる